

<原著>

ネガティブ感情を伴う話題への同調行動に至る要因

池田恵理 信州大学大学院総合人文社会科学研究科
高橋知音 信州大学学術研究院教育学系

概要

SNS上の炎上が社会問題となっているが、実際に炎上に加担している人やネガティブな話題に反応する人は少ない。しかし炎上の拡散要因として、他者との関係性の有無が関わっている可能性が考えられる。本研究では、ネガティブ感情を伴う話題に触れたときの状況によって同調行動が誘発されやすくなるかどうかということと、状況によって同調行動に至る要因の違いを調べた。結果、炎上への同調の影響因として親しい他者の存在が認められた。また、親しい人から共有されてきたという状況は同じでも話題の内容や性差によって、影響する要因に違いが見られた。また自己主張を選んだ人は、状況や内容に関わらず相互尊重欲求が高い可能性が示唆された。

キーワード：炎上，同調行動，被影響性，相互尊重欲求

問題と目的

炎上に関与する人について

炎上とは、「ある人や企業の行為・発言・書き込みに対して、インターネット上で多数の批判や誹謗中傷が行われること」と定義される（山口，2016）。山口（2015）の調査では、実際に炎上に加担したことがある人は全体の約1.5%であり、炎上加担者は少ない、という研究結果が示されている。また横澤・篠田（2022）によれば、投稿内容の攻撃性の高さや数情報の有無にかかわらず「何もしない」という回答をした人が9割前後であったという研究結果が示されており、SNS上でネガティブ感情を伴う話題を見ても、それに対して積極的に反応する人も少ないことが考えられる。これらのことから、実際にネガティブ感情を伴う話題の書き込みを行う人や、それに反応する人はごく少数であることが考えられる。

SNSにおける他者の影響について

Facebookに「いいね」を付与している他者の規模と他者の社会的近接性（友人か他人か）による同調効果への影響を検討したEgebark & Ekström（2018）によれば、1人の見知らぬ人の「いいね」には同調効果がないが、1人の友人の「いいね」は、同調行動を誘発することが示されている。この研究から、個人が自分一人であれば関心や反応を示さな

い話題であったとしても他者の存在を経由することによってその話題に対しての関心や反応を誘発する可能性があると考えられることができる。

同調行動に影響を及ぼす要因

同調行動に影響を及ぼす要因として本研究では、公的自己意識、他者指向的反応、被影響性、友人関係の欲求を検討する。

公的自己意識は、自己の外的側面に注意を向けやすいという特徴があり、公的自己意識の高い人は低い人に比べて、多数派の見解に容易に同調しようとするのが明らかになっている (Froming & Carver, 1981)。また、葛西・松本 (2010) の研究においても同調行動と関連があることが示されており、他者からどう思われるかを気にすることが、同調行動につながっているという考察がなされている。

他者指向的反応と被影響性は多次元共感性尺度 (MES) (鈴木・木野, 2008) の下位因子である。他者指向的反応は、他者に焦点づけられた情緒反応を指す。いじめの抑制には、共感性の中でも特に「ネガティブ感情への同情」や「視点取得」の向上に努めることが重要であると述べられている研究結果があり (王・桜木, 2016)、鈴木らによれば、他者指向的反応と視点取得には有意な正の相関関係が見られることから、視点取得が高い人は、もとより他者指向的反応も高いことが考えられる。本研究では、この他者指向的反応に着目し、ネガティブ感情を伴う話題への同調を抑制する可能性のある要因として検討する。一方、被影響性は、他者の感情や意見に影響されやすい傾向を表し、他者の心理状態に対する素質的な反応傾向であるが、MES 作成の際には肯定的な刺激よりも否定的な刺激に反応しやすい情動性ではないかと考察されている。このことから、ネガティブ感情を伴う話題に反応し同調する際に、被影響性は正の影響を持つ可能性が考えられる。

友人関係の欲求 (榎本, 2000) は、相互尊重欲求、親和欲求、同調欲求の3つの下位因子で構成されており、榎本 (2000) によれば、友人への信頼・安心感とともに不安感も友人への欲求を引き起こすことと、友人と親しくしたいという欲求が友人との活動を引き起こしていることが示唆されている。本研究では、他者の影響を他者との社会的近接性という観点から検討するにあたり、この友人関係の欲求の側面を測定することとした。

目的

本研究の目的は大きく分けて二つある。一つ目は、ネガティブ感情を伴う話題について、親しい他者から経由されてきたという状況であれば同調行動は増えるのかどうかを明らかにすることである。二つ目は、ネガティブ感情を伴う話題に触れたときの状況や話題の内容によって、同調行動に影響を与えている要因に違いがあるのかを調べることである。また、この目的をより一般的な同調傾向においても検討するため、場面や状況に関わらず、個人が特性として持つ同調傾向に影響を与えている要因に違いがあるのかということも合わせて検討を行う。

仮説

I ネガティブ感情を伴う話題に接触した際の状況として、個人で接触した場合よりも、親しくしている人を經由して接触したときの方が、同調行動が起きやすい。

II-①ネガティブ感情を伴う話題への同調行動に至る人は、公的自己意識、被影響性、友人関係の欲求が高い。

II-②ネガティブ感情を伴う話題へ同調せず、自分の意見を言う人は、他者指向的反応が高い。

III-①同調行動傾向が高い人は公的自己意識、被影響性、友人関係の欲求が高い。

III-②同調行動傾向が低い人は、他者指向的反応が高い。

方法

調査協力者

全国の18歳以上の人にGoogleフォームによる質問紙調査を実施し、180件の回答が得られた。協力者の年齢は18歳から上は80代までと幅広かったが、本研究の目的を鑑み、18歳～20代までの人を分析対象とした（合計172名、男性75名、女性96名、性別その他1名）。また分析対象について、平均年齢は21.44歳、 $SD=1.85$ 、18～27歳であった。

調査手続き

2022年10月上旬～下旬に、全国の18歳以上の人を対象に無記名の質問紙調査を実施した。GoogleフォームのURLをQRコード化し、授業後に配布を行ったり、LINEやTwitter、Instagramを使用してURLを送信したりすることで調査協力を依頼した。

調査内容

同調行動についての質問 ネガティブ感情を伴う話題に触れる場面を設定し、その時の同調行動についての質問を設定した。他者から共有されてきたかどうか、という点と、共有されてきた話題の内容で質問項目を分けて設定した。1問目は「1. SNS等において、有名人の不祥事などが炎上している情報（そのときはじめて知った）を見かけたとき。」とし、選択肢は「否定も肯定もせず、流す。（無関与）」「自分のコメントをつけずに拡散する。（同調）」「自分のコメントをつけて拡散する。（私見共有）」の3つとした。2問目は「2. 普段親しくしている人から、有名人の不祥事などが炎上している情報（そのときはじめて知った）を、ネガティブ感情を伴って知らされたとき。（例. その話題についてとても批判的に話している）」とし、選択肢は「否定も肯定もせず、流す。（無関与）」「その人に同調する。（同調）」「その人の意見に関係なく、自分の意見を伝える。（自己主張）」の3つとした。3問目は「3. 普段親しくしている人から、自分が知っていて、交流がある人への悪口（そのときはじめて聞いた）を、ネガティブ感情を伴って聞かされたとき。（例. 悪口に、批判的な感情や悪意が伴っている）」とし、選択肢は2問目と同様であった。

同調行動尺度 葛西・松本 (2010) によって作成された、「仲間への同調」因子 (12 項目) と「自己犠牲・追従」因子 (10 項目) の 2 因子を持つ同調行動尺度を使用した。「5. とてもあてはまる」から「1. ほとんどあてはまらない」の 5 件法で回答を求めた。

公的自己意識 岩淵ら (1981) によって作成された「自己意識尺度」の中の下位尺度から「公的自己意識尺度」(6 項目) を選出し使用した。「5. 非常にあてはまる」から「1. まったくあてはまらない」の 5 件法で回答を求めた。

多次元共感性尺度 (MES) における他者指向的反応・被影響性 鈴木・木野 (2008) によって作成された「多次元共感性尺度 (MES)」の中の下位因子から「他者指向的反応」(5 項目) と「被影響性」(5 項目) を選出し使用した。「5. とてもよくあてはまる」から「1. 全くあてはまらない」の 5 件法で回答を求めた。

友人関係の欲求の側面 榎本 (2000) によって作成された、「相互尊重欲求」因子 (8 項目), 「親和欲求」因子 (9 項目) と「同調欲求」因子 (6 項目) の 3 因子を持つ「友人関係の欲求の側面」尺度を使用した。「6. とてもよく思う」から「1. 全く思わない」の 6 件法で回答を求めた。

倫理的手続き 本研究は、信州大学「教育学部研究委員会倫理審査部会」の承認を受けた上で実施された (管理番号: 22-14)。

結果

仮説 I の検討

本研究において独自に作成した Q1~Q3 について、各質問の具体的な内容と、選択肢ごとの人数を表 1 に示す。

表 1 Q1~Q3 における選択肢ごとの人数

	無関与	同調	自己主張 (Q1私見共有)	合計
Q1 (SNSで炎上案件)	170	0	2	172
Q2 (親しい人から炎上案件)	71	27	74	172
Q3 (親しい人から悪口)	76	18	78	172

Q1 と Q2 において、無関与群と同調群を抜粋し、マクニマーの検定を実施した。分析の結果、親しい人から伝わった状況で有意に同調行動が多く生起することがわかった ($z = 5.00, p < .001$)。

仮説 II の検討

Q1~Q3 の各選択肢を選んだ人において、各尺度得点の平均値に差があるかどうかについて検討する。性別と各選択肢を独立変数とし、各尺度得点を従属変数とした 2 要因分散

分析を実施した。結果について、Q1 から Q3 の順に有意であった結果のみ以下に示す。

Q1 (SNS で炎上案件) について

2名を除いて同じ選択肢(無関与群)を選択していたため、得点の比較は行わなかった。

Q2 (親しい人から炎上案件) について

相互尊重欲求 性別と選択肢の交互作用が有意であった ($F(2, 165) = 2.32, MSE = 0.41, p = .048, \text{partial}\eta^2 = .04$)。まず、選択肢の単純主効果を男女別で検討したところ、女性において有意差が認められた ($F(2, 165) = 3.34, MSE = 0.41, p = .038, \text{partial}\eta^2 = .07$)。Holm 法による多重比較の結果、同調群より自己主張群の方が、相互尊重欲求が有意に高いことが示された。続いて、性別の単純主効果を選択肢ごとに検討したところ、選択肢ごとの男女差については、同調群 ($F(1, 165) = 8.67, MSE = 0.41, p = .004, \text{partial}\eta^2 = .26$) において有意差が認められた。この結果から、同調群における相互尊重欲求は女性より男性の方が有意に高いことが示された。

Q3 (親しい人から悪口) について

公的自己意識 性別の主効果は有意であった ($F(1, 165) = 10.26, MSE = 0.48, p = .002, \text{partial}\eta^2 = .06$)。この結果から、男性よりも女性の方が、公的自己意識が有意に高いことが示された。

被影響性 性別と選択肢の交互作用が有意であった ($F(2, 165) = 3.22, MSE = 0.61, p = .042, \text{partial}\eta^2 = .04$)。まず、選択肢の単純主効果を男女別で検討したところ、女性において有意であった ($F(2, 165) = 8.82, MSE = 0.61, p < .001, \text{partial}\eta^2 = .16$)。Holm 法による多重比較の結果、三か所で有意差が示され、無関与群より同調群、自己主張群より無関与群、そして、自己主張群より同調群の方が、被影響性が有意に高いことが示された。

相互尊重欲求 選択肢の主効果は有意差が認められた ($F(2, 165) = 10.08, MSE = 0.38, p < .001, \text{partial}\eta^2 = .11$)。Holm 法による多重比較の結果、無関与群よりも自己主張群の方が、相互尊重欲求が有意に高いことが示された。

同調欲求 性別の主効果は有意であった ($F(1, 165) = 10.92, MSE = 0.95, p = .001, \text{partial}\eta^2 = .06$)。この結果から、女性よりも男性の方が、同調欲求が有意に高いことが示された。また、選択肢の主効果も有意差が認められた ($F(2, 165) = 4.35, MSE = 0.95, p = .014, \text{partial}\eta^2 = .05$)。Holm 法による多重比較の結果、無関与群よりも同調群、そして、自己主張群よりも同調群の方が、同調欲求が有意に高いことが示された。

仮説Ⅲの検討

同調行動尺度の二つの下位尺度「仲間への同調」「自己犠牲・追従」をそれぞれ目的変数、それ以外の尺度を説明変数とした重回帰分析を、参加者全体、男性のみ、女性のみ、の3パターンで実施した。結果を表2と表3に示す。

表2 仲間への同調を目的変数とした分析結果

	仲間への同調		
	全体	男性	女性
公的自己意識	.13 **	.18 *	.09
他者指向的反応	-.06	-.07	-.04
被影響性	.31 **	.27 **	.32 **
相互尊重欲求	-.15 **	-.26 **	-.07
親和欲求	.32 **	.30 **	.33 **
同調欲求	.40 **	.42 **	.39 **
決定係数	.66 **	.63 **	.70 **

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

分析の結果、決定係数は参加者全体、男性のみ、女性のみいずれにおいても1%水準で有意であった（全体： $R^2 = .66$, $F(6, 165) = 54.41$, $p < .001$, 男子： $R^2 = .63$, $F(6, 68) = 19.06$, $p < .001$, 女子： $R^2 = .70$, $F(6, 89) = 33.99$, $p < .001$ ）。

許容度は、全ての尺度について VIF の値を検討したところ、最大値が参加者全体では 1.74、男性では 1.61、女性では 1.81 であり、いずれも 4.00 を超えていないため、多重共線性の問題はないと判断した。

表3 自己犠牲・追従を目的変数とした分析結果

	自己犠牲・追従		
	全体	男性	女性
公的自己意識	.06	.07	.05
他者指向的反応	-.05	.03	-.10
被影響性	.51 **	.64 **	.41 **
相互尊重欲求	-.23 **	-.06	-.29 **
親和欲求	.10	-.08	.22 *
同調欲求	.02	-.08	.18 *
決定係数	.41 **	.40 **	.49 **

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

分析の結果、決定係数は参加者全体、男性のみ、女性のみいずれにおいても1%水準で有意であった（全体： $R^2 = .41$, $F(6, 165) = 19.11$, $p < .001$, 男子： $R^2 = .40$, $F(6, 68) = 7.67$, $p < .001$, 女子： $R^2 = .49$, $F(6, 89) = 14.43$, $p < .001$ ）。

許容度は、全ての尺度について VIF の値を検討したところ、最大値が参加者全体では 1.74、男性では 1.61、女性では 1.81 であり、いずれも 4.00 を超えていないため、多重共線性の問題はないと判断した。

考察

仮説Ⅰの検討

Q1 は自分一人で炎上の話題を見かけたという状況であり、ほとんどの人が無関与を選択していることから、横澤・篠田（2022）の研究結果に従うものとなったと言える。本研究では、親しい人経由で炎上案件を知った場合であれば、同じ内容を自分一人で見かけた場合よりも同調する人が増えるのではないかという仮説に基づいて調査を行ったが、この仮説は支持された。このことを Egebark & Ekström（2018）の研究結果を考慮して考察すると、親しい人の存在が同調効果を生み出したと考えることができる。

仮説Ⅱの検討

Q1（SNSで炎上案件）について Q1（SNSで炎上案件）については、各群の人数に大きな偏りがあり、行動に影響を与える要因について結果を出すことができなかつた。ただし、仮説Ⅰの検討で述べたように、このように人数の偏りが大きいことは、先行研究の結果に従うものになったと言える。

Q2（親しい人から炎上案件）について 相互尊重欲求は、女性において、同調群より自己主張群の方が有意に高いことが示された。一方同調群においては、女性より男性の方が有意に高いことが示された。このことから、同調する人と自己主張する人の相互尊重欲求の高さには男女で違いがあることが明らかになった。相互尊重欲求は、「友達には私の意見をきちんと言いたい」といったような内容の項目で構成されており、友人と互いの個性を尊重する関係を望む欲求である（榎本，2000）。Q2（親しい人から炎上案件）という状況で、自己主張群において相互尊重欲求が高いことは、互いに意見を言い合いたいという欲求の特徴に従うものであると考えられるが、この結果は男性にはみられず女性のみでみられた。榎本（2000）によれば、大学生において女子の方が相互尊重欲求が有意に高いという結果が得られているが、本研究で男女差が見られたのは同調群においてのみであり、これは男性の方が高いという結果になった。女性にとって互いに尊重し合いたい欲求があるときに取る行動は友人と意見を述べ合うことであるという捉え方になっている可能性がある一方、男性にとっては単に相手に同調しているときでも互いに尊重し合いたい欲求が高いという可能性が考えられる。

Q3（親しい人から悪口）について 被影響性は、女性において、同調群、無関与群、自己主張群の順で有意に高いことが示された。島ら（2021）によれば、MESにおいて認知的共感にあたる「視点取得」、情動的共感にあたる「他者志向的反応」と「被影響性」が男子学生よりも女子学生の方が有意に高かったという報告がされている。これを踏まえると、本研究において被影響性の差が女性においてははっきりと出ているのは、女性の情動的共感の高さが行動選択に影響したからではないかという可能性が示唆された。被影響性は他者の感情や意見に影響されやすい状態を示していることを考えると、同調群、無関与群、自

己主張群の順に被影響性が高くなったことはこの定義に従った結果であると言える。

続いて相互尊重欲求は、無関与群よりも自己主張群の方が有意に高かった。理由は Q2 の状況と同様に、自己主張群において相互尊重欲求が高いことは、互いに意見を言い合いたいという欲求に沿うものであるからと考えられる。

続いて親和欲求において、無関与群よりも同調群、自己主張群よりも同調群の方が有意に高いことが示された。榎本（2000）は、親和欲求の主な内容は楽しむことと仲間づきあいを望むことであり、友人に対して求める基本的で中心的な欲求であると述べている。この定義に沿って考えると、同調という行動を選択する人は、友人との親しい付き合いを望むという欲求のために相手との関係維持を図っているという動機が潜在している可能性が考えられる。

続いて同調欲求においても、無関与群より同調群、自己主張群より同調群の方が有意に高いことが示された。同調欲求とは、互いの行動や趣味の一致を望むもので、自分たちは「同じだ」という感覚を強く望むのが特徴である（榎本，2000）。この定義に沿って考えれば、相手の意見を流すことを選択する無関与群や自分の意見を主張する自己主張群よりも相手への同調を選択する同調群において同調欲求が高いことは自然な結果と言える。

仮説Ⅲの検討

目的変数を「仲間への同調」にした場合について述べる。男女に共通する要因として、被影響性、親和欲求、同調欲求が挙げられる。被影響性は他者の感情や意見に影響されやすいという性質であり、影響のされやすさゆえに内心から相手の意見や行動を受け入れるハードルも下がり、同調行動につながりやすい性質であると言えるのではないかと考えられる。親和欲求の高い人は、親しい仲間づきあいを望むから相手の意見や行動を受け入れるという方略を取り、同調欲求の高い人は、相手と互いの行動や趣味の一致を望むからまずは相手の意見や行動を受け入れるという方略を取るのではないかと解釈できる。一方、男性には見られたが女性には見られなかったものとして、正の影響を及ぼしていた公的自己意識と、負の影響を及ぼしていた相互尊重欲求が挙げられる。まず、公的自己意識と仲間への同調には比較的強い関係が見られたことが葛西・松本（2010）によって示されている。これが女性では見られず男性で見られた理由として、本来公的自己意識そのものの性差を見ると、男性より女性の方が高いという結果が得られている（葛西・松本，2010）ことを踏まえると、男性で自分がどう見られるかを気にする傾向が高い人は、何か他の要因が影響している可能性が考えられる。葛西・松本（2010）は、仲間への同調傾向がある者は、もともと特性不安が高い傾向があると推測しており、本研究では想定していなかった別の要因が関連している可能性がある。一方、相互尊重欲求については、男性における仲間への同調に対して強い負の影響を持っている。榎本（2000）によれば、青年期の友人への感情は、大学生において男性は「独立」が高く、女性は「信頼・安定」と「独立」が高いという結果が報告されていることから、男性では友人に対して独立し、互いに意見を言

い合うような相互尊重の関係性が重視され、それゆえに相手の意見や行動を受け入れるという同調傾向に強く負の影響を及ぼしたのではないかと考えられる。

続いて、目的変数を「自己犠牲・追従」にした場合について述べる。男女に共通する要因として、被影響性が挙げられる。自己犠牲・追従は自分が我慢して相手に合わせて同調する内容の尺度であり、男女ともに被影響性が強い正の影響を及ぼしていた。自己犠牲・追従は表面的同調に相当すると考えられているため、内心からの同調ではなく、影響のされやすさはあまり関連しないのではないかと考えられたが、葛西・松本(2010)によれば、自己犠牲・追従においても特性不安との関連が見られており、特性不安の高さが被影響性と自己犠牲・追従の関係を媒介している可能性が示唆された。また、女性にはみられたが男性にはみられなかったものとして、正の影響を及ぼしていた親和欲求及び同調欲求と、負の影響を及ぼしていた相互尊重欲求が挙げられる。親和欲求の高い人は親しい仲間づきあいを維持するために、自分を抑えて相手に合わせるという方略を取っていると解釈することができ、同調欲求の高い人は互いの行動や趣味の一致を求めて、自分を抑えて相手に合わせるという方略を取っていると解釈することができる。男性ではみられず女性ではみられた理由は、自己犠牲・追従という尺度は自分を抑えて相手に合わせるという内容である、という点にあると考えられる。青年期の友人への感情は、大学生において女性は「信頼・安定」と「独立」が高いという結果(榎本, 2000)が出ていることを踏まえると、女性は「信頼・安定」が高く、男性よりも友人との関係を安定させることを望む傾向が高い可能性が考えられる。このことから、相手との関係を維持するために自分を抑えるという動機から同調行動に至るプロセスが男性よりも生起しやすいのではないかと考えられる。また、女性において相互尊重欲求が自己犠牲・追従に対して強い負の影響を及ぼしている理由を考察する。自分を抑えて相手に合わせるという行動を取らない、という選択をすることは、信頼・安定を重視する女性にとって負荷が高い行動であると考えられ、その行動を取る人の要因を考えれば、個人要因として互いに意見を言い合いたいという欲求が強いことが考えられる。

総合考察

同調行動を選択する人の要因

仮説 I が支持されたことにより、親しい他者の存在によって、本来自分一人で見ても流してしまうような炎上についての話題に同調する人がいることが示された。これは Egebark & Ekström (2018) の研究結果に従うものとなった。本研究では特定の SNS サービスを指定せず、また、ネガティブ感情を伴う話題という状況設定で質問を作成したため、Egebark & Ekström (2018) が調査を行った Facebook 以外の SNS においても、また、対象となる話題が炎上についての話題であっても、親しい他者の存在による同調効果が生じている可能性が示唆された。

続いて、親しい他者から共有されてきた炎上の話題に同調することを選択した人の要因だが、男性で同調を選択した人が相互尊重欲求が高いという結果が示された。本研究では、男性と女性で友人に対する欲求と行動の関連の仕方が異なるためにこのような結果になったと考察した。ただ、男性が友人関係に求める欲求において相互尊重欲求は本来的に高い可能性が考えられるため、同調行動に特に影響したと解釈することには限界がある。

続いて、親しい他者から共有されてきた悪口についての話題に同調することを選択した人の要因だが、参加者全体では仲間への同調の高さ、親和欲求の高さと同調欲求の高さが影響している可能性が示され、女性では自己犠牲・追従の高さと被影響性の高さが影響している可能性が示された。友人関係への欲求が同調行動に影響している可能性は仮説に従うものであり、友人との付き合いを楽しく維持したいという欲求や友人と趣味や好み的一致を望むような欲求が同調行動に表れたのだらうと考えられる。また、悪口というネガティブ感情を伴う話題に対する同調であるため、話題そのものに対する同調というより、その話題を共有してきた親しい他者に対する同調である可能性が高いのではないかと考えられる。また、女性においては悪口という話題に同調する際に自分を抑えて相手に合わせるという傾向の高さや影響のされやすさが影響因として出ていたが、女性は友人に対して信頼や安定を望む傾向があるという先行研究の結果を踏まえれば、炎上ではなく悪口という話題は関係維持を考えたときにより扱いを慎重にしなければならない話題であり、個人要因の差がはっきりと表れたのではないかと考えられる。

以上をまとめると、炎上という話題と悪口という話題で同調行動への影響因に差が出ていることが示されており、単にネガティブ感情を伴う話題と言っても、炎上と悪口では話題の身近さが異なっているため、それによって差がみられたのではないかと考えられる。有名人等の炎上は世間で起こっているニュースなどであるため、自分の身近で起きているわけではなく、同調しても話題に対して関心を持たなければ拡散行動につながる可能性が低いと考えられる。一方、本研究で設定した悪口は知人に関するものであり、実際にその人との間に関係性が存在していて、日常生活に影響を及ぼすおそれがあるため、悪口への同調はそれ以降の拡散につながる可能性が考えられる。

自己主張を選択する人の要因

本研究の仮説では、同調行動ではなく自己主張を選択する人は他者志向的反応が高いのではないかと予想していた。しかし結果は、共有されてきた話題が悪口についてである場合は、女性の自己主張群において同調群より相互尊重欲求が高いという結果になっており、共有されてきた話題が悪口である場合は、性差は関係なく、自己主張群において無関与群より相互尊重欲求が高いという結果になった。さらに、仮説Ⅲ-②の結果を合わせて検討すると、個人特性としての同調傾向にも相互尊重欲求が負の影響を及ぼしていることが示されている。このことから、ネガティブ感情を伴う話題が親しい他者から共有されてきた場合に、そこに同調せず、自分の意見を伝えることを選ぶ人は、相互尊重欲求が高いとい

う個人要因を持つことが示された。研究構想時点では、友人関係の欲求という尺度における3つの下位尺度によって同調行動への影響の出方に違いがあるというところまでは想定していなかったが、分析の結果、はっきりとした差をみることができた。榎本(2000)によれば、相互尊重欲求は青年期における同性の友人への欲求の最終段階であると言うことができ、互いの相違点を理解し、互いに認め合うことを望む欲求とされる。このことを踏まえると、自他の考えを理解し尊重し合える素地を持っている人は、ネガティブ感情を伴う話題が共有されてきた場合でも、安易に同調せず、自分の意見を主張することで、親しい他者が抱えていたネガティブ感情を抑制し、その後の話題拡散も抑制できる要因となる可能性が示唆された。

本研究の限界と今後の課題

本研究では、同調行動が実際に拡散行動にまでつながるのかという点は確認することができていない。今後の研究では、同調した人が次の拡散行動に至るかどうかなどということについての検討が必要になると考えられる。また、本研究で設定した独自質問の問題も本研究の限界として挙げられる。まず、各質問の状況において選ぶ選択肢が、各質問で質的に異なるものになってしまっていたところがあった。ただ、本研究の目的は炎上についての話題に同調する際の影響因を探ることであったため、炎上という話題と悪口という話題でより詳細な検討をすることは、今後の研究課題として検討されることを期待したい。

本研究の意義

本研究では、ネガティブ感情を伴う話題に触れたときの状況をいくつか設定し、他者の影響と、同調行動への影響因を合わせて検討した。親しい他者の存在によって、同調行動が生起しやすくなる可能性が示されたことと、同調行動の影響因に男女差がみられたことは、ネガティブ感情を伴う話題の拡散の仕組みを考えるうえで他者の存在や性差を検討する必要性を示すことができたと言える。また、同調行動ではなく自己主張を選択する人の要因として、性差や状況に関わらず、相互尊重欲求が影響を及ぼしていることが確認できたことから、友人に対して互いに尊重し合いたいという欲求を持っていることで、ネガティブ感情を伴う話題への安易な同調やその後の拡散を抑制できる可能性が示唆された。このように、同調行動という観点からネガティブ感情を伴う話題の拡散につながる要因を検討した本研究は、今後、炎上等のネガティブ感情を伴う話題の拡散のメカニズムを明らかにしていくにあたって、一つの切り口を示すことができたのではないかと考える。

付記

本研究は、信州大学大学院総合人文社会科学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

引用文献

- Egebark, J. & Ekström, M. (2018). Liking what others “Like”: Using Facebook to identify determinants of conformity. *Experimental Economics*, *21*(4), 793-814.
- 榎本 淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動の関連 教育心理学研究, *48*, 444-453.
- Froming, W. J. & Carver, C. S. (1981). Divergent influences of private and public self-consciousness in a compliance paradigm. *Journal of Research in Personality*, *15*, 159-171.
- 岩淵 千明・田淵 創・中里 浩明・田中 國夫 (1981). 自己意識尺度についての研究 日本社会心理学会第 22 回大会論文集, 37-38.
- 葛西 真記子・松本 麻里 (2010). 青年期の友人関係における同調行動ー同調行動尺度の作成ー 鳴門教育大学研究紀要, *25*, 189-203.
- 小山 耕平・浅谷 公威・榊 剛史・坂田 一郎 (2019). ネット炎上におけるユーザーの共振構造 人工知能学会全国大会論文集第 33 回大会.
- 王 影・桜木 惣吉 (2016). いじめ場面における傍観者の共感性といじめ関連行動との関係 愛知教育大学健康支援センター紀要, *15*, 3-10.
- 島 孟留・中雄 勇人・田井 健太郎・霜触 智紀・木山 慶子・新井 淑弘・鬼澤 陽子 (2021). 大学生の運動・スポーツ活動の頻度や体力・運動能力と共感性の関連 群馬大学共同教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編, *56*, 109-117.
- 鈴木 有美・木野 和代 (2008). 多次元共感性尺度 (MES) の作成ー自己指向・他者指向の弁別に焦点を当ててー 教育心理学研究, *56*, 487-497.
- 山口 真一 (2015). 実証分析による炎上の実態と炎上加担者属性の検証 情報通信学会誌, *33*(2), 53-65.
- 山口 真一 (2016). 炎上加担動機の実証分析 2016 年社会情報学会(SSI)学会大会予稿.
- 横澤 侑奈・篠田 直子 (2022). 攻撃的ツイートに対する拡散行動促進要因に関する探索的研究 信州心理臨床紀要, *21*, 99-114.